

「光あれ！」

2022年12月4日（日）仙台教会主日礼拝説教 創世記 1：1～5

牧師 宇都宮 毅

おはようございます。本日より、第2待降節、アドベントです。教会が敢えて、待つことを大切にする時期と言えます。待つことができない現代人、すべてが時間との闘いとなっています。しかしその生き方の中に、何か失っていることはないでしょうか。皆さん、ちょっと昔を思い出して下さい。携帯電話がなかった時代、私たちは待ち合わせということをしました。今でも待ち合わせをしますが、意味合いが少し違ったように思います。午後7時に、一番町の水時計前で集合というようなことをしておられたのではないのでしょうか。待ち合わせって、素晴らしい言葉だと思います。一人では待ち合わせすることはできません。待ち合わせをしている相手を信頼し、自分と相手の思いをそこに合わせていく。時と場所を待つという行為によって、合わせていくなど、今の時代にはないかもしれません。すべて自分の時になっています。このアドベントの時、忙しい師走ということもありますが、たまにはゆっくりとこの世界のことや自分、そして何より神のことを考えてみる時間を持ちたいと思います。そういう意味でいうなら、この礼拝の時は一度生活の歩みを止めて、神のみ言葉に集中する時です。そのような時が与えられていることは恵みだろうと思います。これからも神の思いと人の思いを待ち合わせる礼拝の時を大切にしていきたいと思います。

さて現代社会において、希望や光というものが見えづらくなっているように思います。今朝は創世記1章の世界創造物語を見ながら、私たちはこの時何を待ち、何に希望を持つのかを共に聴いてみたいと思います。

皆さんはこの創世記はいつ頃、編纂されたものかご存じでしょうか。それはバビロン捕囚期以降と言われています。そのため、当時のオリエントの神話からも影響を受けている文章でもあるのです。バビロニアの創造神話にこんな物語があります。

「マルドック、バビロニア神話に出てくる最強の神。エアとダムキナの子。この神の誕生を喜んだエアは他の神の2倍のものを与えた。すなわち4つの目、4つの耳を持ち、口からは炎を吐き、^{いじょうぶ}偉丈夫なその肉体には光輝く神の衣をまとっていた。

冒険心の強いマルドックは風を皮ひもでつないで支配したり、神々の住居を守護する

ドラゴンに口枷くちかせをはめたりとイタズラを繰り返した。神々の不満から、最も古い神ティアマトはマルドゥクを倒すことにした。エアはマルドゥクを助けるため、ティアマトの孫であり、自分の祖父でもあるアンシャルにティアマトが反乱を企てているとざんげん讒言し、天上の神々は二つに分かれて争うこととなった。ティアマトの創り出した化け物たちの前に、エアも、その父のアヌも逃げるしかなかった。そこでマルドゥクが戦うことになった。マルドゥクは戦いの前に自分が神々の王となることを認めさせ、手には雷をつかみ旋風の戦車に乗り、戦いに挑んだ。その強さと智慧で、ティアマトとその軍勢を破ったマルドゥクは、ティアマトの死骸から天地と海を造った。」

当時のユダヤ人はバビロニア帝国に支配され、捕囚の民となっていました。国を失い、土地を奪われ、国の知識人はすべてバビロニアに連れて行かれていました。そこは多神教の世界であり、唯一の神ヤハウエを信じる彼らには耐えられない場所であったはずで
す。しかしユダヤの民より、バビロニアの民の方が豊かな生活をしていました。それは
憧れにもなっていたかもしれません。唯一なる神ヤハウエより、多神教の方が良いと
考えた人たちもいたでしょう。しかし、捕囚の民であるということでは自分らしさ、ユ
ダヤ人のアイデンティティを失うことになったのです。

彼らは波風立てずに、バビロニアの文化、慣習、宗教になれていくしかなかったで
しょう。けれども、そのような生活は彼らに生きる力を失わせていったはずで
す。希望が見えず、自分たちはいつかバビロニアに吸収され、その歴史さえ、世界から消えてしま
うのではないかと考えたはずで
す。

そんな捕囚を経験しているがゆえに、彼らは自分たちの起源を、どのようにこの世界
が創られたのかを形にする作業を始めたのではないのでしょうか。

創世記の最初の言葉は、「初めに、神は天地を創造された」です。この文章はユダヤ
の民の宣言のように聞こえます。先ほどのバビロニアの創造神話のように、神々の闘い
によって世界ができたのではなくて、唯一なる神によって創られたと彼らは言うのです。
「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。」混沌とは
秩序も生命もない創造以前の状態を表す言葉です。そして闇が深淵の面にありと語られ
ていますが、岩波訳ですと「闇が混沌の海の面にあり、神の霊がその水の面に働きかけ
ていた」となっています。実はここにバビロニアの創造神話関わっています。この混
沌の海というのはティアマトとその軍勢を破ったマルドゥクがティアマトの死骸から
天地と海を造ったと語っていた海につながっているのです。

神々の闘いの残骸に対して、唯一なる神が働きかけていた、つまり神々の死の後、世界の創造は唯一なる神によってなされたことが強調されているのです。神々に対して、唯一なる神が勝ったことを暗示しています。

そこで、神は言われます。「光あれ。」光とは生命、秩序、救いの根源を表す象徴です。神の言葉がそのまま光という存在になっています。そしてその光を見て、神は良しとされます。光が生まれた後に、闇はクローズアップされます。神は光と闇を分けて、昼と夜と呼んでいます。そこには、夕べがあり、朝があったのです。朝があり、夕べがあったのではなかったのです。ですから、ユダヤの民は一日が夕方から始まります。これが唯一なる神の一日目にされたことだと彼らは言葉にしたのです。

この文章の中に、彼らの神への希望が隠されています。彼らの生活はバビロニア帝国によって奪われたのです。神々が彼らを支配したのです。彼らは新しい創造を必要としていました。唯一なる神の光、生命、秩序、救いが必要だったのです。まさに彼らの前には神々による混沌があったのです。けれども、神の言葉によって、新しい創造物語が始まる、それも神の言葉「光あれ！」で始まるのです。それはまさに彼らが待つ、希望です。神々の死骸の後に、神の創造が始まる。神の霊が働きかけ、そこから、新しい生活が始まることを彼らは願い、言葉にしたのです。しかし、神からの光を見るということは自分たちの闇を知るということにもなります。彼らがどうしてバビロニアに支配され、捕囚の民となったのか。それは、まさに神の言葉に聴かなかつたからだと彼らは思っていたのです。だから光あれの後に、夕べがあるのです。自分たちの暗闇を知ることです。神を信頼せず、その神を語る預言者たちを迫害し、神と共に生きるように言われていた同胞の民を虐げ、自分だけの利益を求めて生きてきたことがこの結果を生んでいる。けれども、その闇は永遠に続かず、必ず朝を迎える。それは、まさに彼らがバビロニアから解放され、新しい命が始まることを期待していた言葉であったのです。実際、彼らが解放されるまでに、約 60 年の歳月を必要としました。彼らは神の言葉に希望を持ち、朝を持ったのです。

では、私たちはどうでしょうか。あのユダヤの民と現代の私たちは何が違うのでしょうか。地は混沌です。今の世界に、秩序と生命があるのでしょうか。新型コロナウイルス感染症によって、生命の危険を感じ、経済の格差が広がっています。さらに世界の各地で戦争が行われ、命が奪われています。誰かが幸せになるために、他の生命が奪われ、新しい秩序を造るために、他の秩序が壊され、そこに残っているものは混沌の海であると言えないでしょうか。その海は憎しみと悲しみという大きな波として私たちのところ

に押し寄せてきています。今だからこそ、私たちの世界も新しい創造、神の「光あれ！」という言葉に希望を持ち、待つ必要があるのではないのでしょうか。光は生命、秩序、救いを現しています。

そして、生命であり、救いである存在を聖書はこのように言っています。「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。」「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

この言が肉となった存在はイエスだと聖書は語っています。創世記1章で、ユダヤの民が希望とした神の言葉「光あれ！」はまさに2000年前に肉体をもって、地上を歩まれた方だと言えます。私たちも今地が混沌としている中、「光あれ！」という神の言葉が語られることを待っているとも言えます。そしてその希望の光を待ちつつ、夕べも経験するでしょう。既にイエスはこの世に来ていながら、今だ私たちのところに来ていないとも言えます。だからこそ、夕べが始まります。ユダヤの民と同様に、神や人を信頼せず、人々を迫害し、この世で小さくされている人たちを虐げている私たちがここにあります。この世界に生きる全てのものがこの夕べに真剣に向かい合わなければならないでしょう。しかし、その歩みは失望ではないのです。必ず朝が来ます。朝が来ない夕べはないのです。

このような混沌としていて、希望のない時代だからこそ、私たちは光であり、生命であり、秩序であり、救いであるイエスを待つのです。イエスの誕生、そしてその人生から聞きつつ、世界の新しい創造の時を共に歩んでいきましょう。

最後に聖書を一箇所お読みして、メッセージを終わりたいと思います。

ローマ8:22~25「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。被造物だけではなく、霊の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」